

賛美と祝福を ルカ 2:25-35	2023. 9. 10 合同 NO. 707 春日部福音自由教会 山田豊
--------------------------	---

本日は、3つの会堂の礼拝者がともに集う合同の礼拝で、敬老礼拝となっております。春日部市では、4年ぶりに一つの会場で敬老の集いが来週おこなわれるのですが、今年から「長寿を祝う会」という名称に変更されました。「老」という文字すら、嫌われるのでしょうか？

本日のテキストは、主イエスのご降誕物語に関連して開かれる箇所だと思います。22節に「清めの期間が満ちた時」とありますから、幼子イエスは誕生から2か月ほどたっていたと思われれます。神殿に昇ったヨセフとマリア、そしてイエスに目を留めたのは、シメオンという人でした。当時は長老や老人に祝福を求める習慣があったこと、文脈からして、彼はおじいちゃんに当たるような年齢だったかもしれません。

シメオンは神殿に詣でる夫婦をほかにも見ていたでしょうが、この幼子こそ救い主であると認め、神をほめたたえたことは、聖霊が彼の上にとどまっていたことの証しでしょう。今の時代においては、心の巡礼として、救いの御子に目を留めることは大切なことです。これも聖霊の御業です。彼はまた、主のキリストを見るまでは決して死なない、とのお告げまで受けていました。人が死ぬのは、交通事故や病気になったり、歳をとったからではありません。それは神のみ手の中にあることなのです。生きることは言うまでもなく、死さえも神からきていることを、受け止めることのできる人は幸いです。それがたとい人の目に、どんなに不条理のことに思えても、です。

シメオンが両親を祝福した言葉は、34,35節に書かれています。しかしその内容は、イエスの苦難と十字架の死を予見したものであり、わが子の死を前にした、マリアの深いいたみを語るものでした。しかしこれは、神から出た言葉であり、単なるおめでどうという祝福の言葉ではなかったのです。マリアはこの言葉を受け止め、やがてゴルゴタにおいて、シメオンの言葉を思い起こしたことでしょう。そして十字架の死を通して、神の救いの御業が成就したことを悟ったのだと思います。

老いを忌み嫌ってはなりません。高齢の方も、自分にはもう使命はないと言ってはいけません。このシメオンのように、神を賛美し、若い者に神の言葉を祝福として与えること。そこに、老人の果たす使命があります。そして若者は、そこに秘められた神の御心を悟り、人生の先輩に倣って、神の道を歩んでいく決意をするのです。

本日の敬老礼拝が、次の時代を開く新しい門となりますように。